

平成 25 年 4 月 25 日 乃木坂スクールレポート

山野辺涼子（社会福祉士・老人保健施設支援相談員）

乃木坂スクールを受講されている皆様は、どのような思いで写真をご覧になっていたでしょうか。はたまた、現在医療や福祉に関わる仕事をされていない方々は、どのような思いを抱かれるのでしょうか。

『昔はひどかった』そんな思いを抱かれますか？私は『昔も今も変わりがない』と思いました。多床室の病院の写真、拘束の写真、私物を処分しておむつの着用を求める看護助手さんの話…

ショックでしたが、今も大差ないと感じてしまったことに衝撃を覚えました。写真が白黒でなくてカラーであったなら、見分けがつかないのではないかと思うほどです。

今の多床室にはベッドごとにカーテンがついているとはいうものの、音も匂いも筒抜けで、気配も伝わります。身体拘束も禁止されることにはなっていますが、条件付きで…身元引受人の許可の下で…と抜け道は多く結局ゼロにはなっていません。

働く職員の言動もしかり。トイレ介助をしてもらえずにおむつになるだけではなく、とある病院ではおむつ交換の人手がないとバルーンカテーテルを挿入されることもあると聞きます。

この状況が悪い、ひどいということは誰でもわかることと思います。

写真を見て『自分もこんな入院生活を送りたいな』と思う方はいらっしゃると思いますが、白黒写真がカラーになるほどに時が流れても、そこにはなぜ改革が起こらないのでしょうか。

認知症高齢者が300万人を超えているといわれる今、認知症は他人ごとではありません。まして、老化は誰にも100%訪れるものです。自分が高齢者となった時に待っている環境がどのようなものであるか、この度の講義では写真というツールを通して鮮烈に伝えられることとなりました。目の前にあるものをそのままに伝えられる写真。であるからこそ率直に感じられる事実。まさに『百聞は一見にしかず』です。

この事実を受け止める人が多ければ多いほど、疑問・不安の声は高まるでしょう。そして、その声が改革を生むことになるでしょう。業界で働くごく一握りの人たちが知っているだけ、問題視をしているだけでは何も変わりません。実際に自分が、家族が認知症になって現実と向き合った時にはもう遅いのです。まだまだ自分は…そんな風に思っている世代の方々に、もう何十年も前の歴史として、そして今も変わらぬ現実としてこの写真を見ていただき、声をあげていただくことがより良い老後生活を創りだすための改革へとつながっていくのではないかと思います。